

2019 年横浜ナザレン教会・復活節第七主日礼拝説教
「教会の命」ルカ福音書 10:1～12

【聖書】

ルカ福音書 10:1 その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつむりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。2そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。3行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。4財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。5どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。6平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。7その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。8どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、9その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。10しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。11『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。12言うておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む。」

1 教会の伝道

今日は、主イエスが七十二人の弟子たちを遣わす際にお話しになった言葉を共に聞きます。教会とそこに生きる人々は、2000年の歴史を通して、今日のこのみ言葉をイエス様が自分たちに語っておられる言葉として、新たに聴き続けてきました。教会の伝道とはどういうものか？をここから聞き取り、実践してきました。

ここにはまだ洗礼を受けていない方もいらっしゃいます。また洗礼を受けても、伝道にはあまり興味のない方もいるでしょう。ですが、そういう方々にも、深い関わりがあるテキストです。何故なら、私たちは教会の伝道を担うことを通して、主イエス・キリストがどういってお方かを知ることができるからです。そして主イエス・キリストを知ることを通じて、私たちは「永遠の命」に生きることができます。ヨハネ福音書には、「**永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。**」とありますから。だから、洗礼を受けていようがいまいが、伝道に興味があろうがなかろうが、主イエスが仰る教会の伝道について知ることはとても重要なことなのです。今日はそのことをお話したいと思います。

2 エルサレムへ

今、主イエスはエルサレムに向かおうとされています。ご自身がエルサレムで十字架と復活の出来事を成し遂げなければ、私たち人間を救うことができないと悟られたからです。主イエスのみ顔は、エルサレムへと向けられています。主は私たちの救いをただひたすらに見つめておられます。ですが、まだこの時点で、弟子たちは主イエスのみ心が

全く分っていません。自分たちの名誉や地位や力を求めて、あらぬ方向を見つめています。主イエスに従いゆく志も徹底してはいません。主に「わたしについてきなさい」と招かれているにも拘らず、決断できない優柔不断な弟子たちの姿が今日の聖書箇所直前で描かれています。それは、十字架と復活の主イエスと出会いつつも、主に従うことができない私たちの姿でもあります。しかし、主はそんな弟子たちを、私達を、ご自身の「代理人」として用いてくださるのです。主イエスが私たちやこの世界を見る見方は、私たちとは異なります。私たちの目には欠けただけでイエス様の代理人としてふさわしくないように見えても、主イエスは弟子たちを、私たちをご自身の代理人として選び立ててくださいます。

3 七十二人

今回、ご自身の代わりに派遣する者は七十二人でした。この「七十二」という数字の意味をめぐって昔からいろんな説が取りざたされてきました。その中でも創世記第十章から来ているという説が有力です。創世記第十章には、大洪水のあと世界中に広がったノアの子孫七十二人の名前が系図の形で列挙されており、その七十二人が世界中の民族の祖先となったと語られています。だから、ルカ福音書の10:1に出てくる「七十二」という数字は、世界のすべての民族を現す…と言われています。福音書記者ルカが捉えていた主イエスは、世界中のすべての人に、神の国を宣べ伝えるべく、弟子たちを遣わすお方なのです。主イエスは、民族や性別、年代など、人間が考えるあらゆる条件で差別も区別もされずに、ご自身のもとへと、神の国へと招くお方だと分かります。

4 収穫は多い？

主は派遣にあたって、次のように言われます。2節「**収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主**に願いなさい。」。新約聖書では、伝道の結果、信徒となった人々を「収穫」という言葉で表します。人を収穫物に例えることは現代に生きる私たちには違和感があります。「教会や伝道者を物質的に豊かにするための『収穫』ってこと？結局、キリスト教も他の宗教と同じじゃない。伝道して自分たちが豊かになりたいと思っているんじゃない」と勘違いしそうになります。しかし、「収穫」というのは、そういう意味ではありません。命の造り主であり、私たち一人一人をかけがえなく愛する御神が、ご自身のもとに帰ってきた私たち一人一人をご覧になってとても喜ばれるからです。新約聖書では、この神の喜びを、作物の稔る収穫の喜びに喩えているのです。

では、「収穫は多い」とはどういうことでしょうか？豊かに実った作物も取り入れなければ、刈り入れの 때가すぎ実は落ちて腐るだけ、喜びどころではありません。つまり、「収穫が多い」とは、正確には「収穫を待つ実りは多い」ということ。神に立ち帰るべく準備ができた人は多い、つまり、神の愛に飢え乾いている人は多いということを主はおっしゃっているのでしょう。それは2000年たった現代社会でも変わりません。田はまさに豊かな実りをたたえている。しかし、収穫する働き手がない。収穫時期は短い！急がねばなりま

せん。イエス様にはそれが見えておられた。しかし、私たちにはどれほど世の中が伝道を必要としているか、なかなか気づけません。主のように世界を見ることができないからです。

5 拡大自殺

先週、心をえぐるような痛ましい事件が起こりました。登戸駅でカリタス小学校のスクールバスに乗り込もうとしている生徒の集まりに刃物をもった男が襲い掛かり、小学生と保護者の二人が犠牲となった事件です。襲撃直後に自殺した犯人は、中学卒業以来、周囲とほぼ交わらずに51歳まで生活していたそうです。自殺していますから、その詳しい動機は分かっていませんが、「拡大自殺」と言われるものではないかとのことです。「拡大自殺」―見も知らない人を無差別に殺傷し、他人も巻き込んで自分も死ぬ、事件直後に死ねなくても、死刑になることで自殺を果たす。このような事件は、後を絶ちません。彼らはどうしてこのような破滅した行動を取るのでしょうか？それぞれの個別の状況があるので一概には言うことができないでしょう。しかし、彼らに共通するものとして、誰にも必要とされない人間の癒し難い絶望があるように思えます。だからと言って、何をしてもいいと言っているわけではありません。彼らの行ったことは醜いエゴイズムで、唾棄すべきものです。ですが、結局、人は自分にされたようにしか人にはできない存在です。彼らの生育歴に最大の問題があったことは事実でしょう。自分という存在を根本的に無条件に受け入れてくれる存在を知らない人間の悲惨さが、彼らの凶行に凝縮しているように思えてなりません。彼らは孤独な絶望の中、悪魔に乗っ取られたのです。しかし、人間が別の人間の存在を全面的に受け入れることは不可能。自分を殺そうとする敵さえ赦すイエス・キリストの父なる神を知るしかないのです。義なる愛、愛なる義の神を知らないことは決定的なこと。この神を知らなければ、辛く苦しい環境に叩き込まれた時、それでも自分が生きていてよい存在だと心から思うことはできません。だから、人の存在もそう思えないのです。厳しい子ども時代を通じて、神を知らない周りの社会から歪んだ価値観を教えられ、歪んだ精神のもと、「自分をこのようにした日本社会に復讐して死にたい」と単純に考える。あまりにも幼い、動物以下の考え。しかし、彼らをそこまで追い込んだのは、私たちが作り出す社会であることは事実だと思います。どうしようもない人の罪、私たちの罪が作り出す社会の闇が凝縮したような事件。すべての人が、自分は無条件に愛されている、生きていていい…とは思えずに、他の人と比較して優越感と劣等感の間をウロウロしながら生きている。そんな私たちの命の中で何かのバランスが崩れた時に顔を出すエゴイズムは、彼らの狂気と同一の種類のものではないでしょうか。私たちの社会は、主イエスの目から見れば危機的な状況にあるのではないかな…そう思われる事件です。

6 伝道は教会の命

このような悲惨な事件が起こる度に私は神さまから叱責されているように感じます。「どうして、もっとイエス・キリストを宣べ伝えなかったのだ！私がここであなたを待っている！

ということを一人でも多くの人に伝えなかったのか。イエス・キリストと出会い、私の愛を知ったあなた達が伝えずに、誰が伝えるというのか！」と。人間の罪の現実は厳しいものです。中途半端な生易しい人間の理想で、人間の愛でどうこうできるほど簡単なものではありません。だからこそ、人を越える愛の源である父なる神を伝える必要があるのです。御子さえも差し出すほどに、ご自身の腸がよじれるほどに私たちが父なる神を知らずに滅んでしまうことを悲しまれ痛まれる創造主なる神。私たちは弱い、愚かであり、すぐに父なる神のみもとを離れようとしてしまう、だが、父なる神はその度に私たちを呼び戻されたではないですか。そうして、私たちはより深く神を知り、その義なる愛に生かされてきた、喜びを与えられた。なのに、どうして、どうして、あなたはそれを伝えないのか！そう、神から叱咤されているようです。

だから、教会の伝道とは、教会の勢力をます為でも、牧師や役員や教会員を豊かにする為でもないのです。ただただ、神の愛を告げ知らされ新しくされた喜びを、まだ知らない人に伝えること、神は罪人であるあなたを愛している！と伝えること。そうして、一人でも多くの人が神のみもとに立ち帰る道を示すことで、危機に陥っているこの世に奉仕をしていくことなのです。主イエスが弟子たちに、「財布も袋も履物も持っていくな」と言っているのはこの為です。働くものの報酬は、肉体の命をつなぐ食べ物・飲み物だけで十分なのです。

7 挨拶

主は、私たち人間が気づかずにいる危機的な状況に気づいておられた、伝道することが今何よりも必要であることに気づいておられた…と判る言葉があります。それは「**途中でだれにも挨拶をするな。**」という4節の言葉に現れています。調べてみると、「**挨拶をするな**」とは、「おはようとも言うな」ということではないようです。「この場合の挨拶とは、長々と安否を尋ねたりお茶を飲んだりすることだ」とある本に書いてありました。確かに挨拶をしている間に、言うべきことを言うことが出来なくなってしまうことはあります。本当に大事なこと、また緊急のことを告げなければならない場合、挨拶などをしている場合ではないのです。例えば火事になって、今にも火が襲い掛かってくるような時に、長々と挨拶する人はいないでしょう。両方とも焼け死んでしまいます。「火事だ。逃げろ」と言わねばならない。火事の現場で助けを呼ぶことのように、いま、神の国を宣べ伝えることは、緊急を要することだと主イエスはおっしゃっています。

8 この世への奉仕

忘れてはいけないことがあります。伝道を通じて、教会はこの世を支配しようとするものではありません。この世にあって、この世に奉仕することが教会の伝道です。上から目線の、「救ってあげる」というのは伝道ではないのです。伝道するこの世の人々と、同じ境遇に、同じ立場に立つのです。だから、主は弟子たちに「**出されるものを食べ、飲みなさい**」と二度、繰り返して教えています。「出されるものを食べ、飲む」というのは、現代日本人には想像が付きませんが、食物規定が厳しかった当時のユダヤ人達には相当に

画期的な指示でした。訪ねた先が自分とは異なる信仰を持っている場合、「食べてはいけない」という律法を破ることになりかねないからです。しかし、主はそういう表面的な掟を守ることよりも、伝道する相手と同じものを食べ、同じものを飲むことが重要だとされたのです。それは、神の国を宣べ伝える相手と、同じ立場の者となることです。神の愛を必要とするという点ではなんら変わらない者として、相手とあいたいし、神の国を述べ伝えなさい…ということです。「救われている信仰深い私たちがあなたたちを救ってあげますよ」というのは、主イエスの伝道、教会の伝道ではない。「私も同じ罪人、正しく愛してくださる父なる神がいなくては、自分の命を喜べない者。だけれども、確かに神に救われた者として、生きる希望を証していく」それが伝道であり、神の国を宣べ伝えることだと主はおっしゃっているように思います。

それは何より主イエス・キリストのあり方だからです。フィリピ信徒への手紙には、教会が最初から歌い継いできたキリスト賛歌と呼ばれる讃美歌が記されています。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分となり、人間と同じものとなりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」(フィリピ 2:8 から 9)

けれど、伝道とは、主イエス・キリストの後を従っていくこと。自分たちだけの救いや安寧、平和を求めるのは主イエスではありません。主は報いを求めずに、ご自身の存在を投げ出してまで、この世を救おうとされたからです。だから、伝道して初めて教会はキリストの体となっていくのでしょう。まさに、伝道は教会の命です。神学者カール・バルトが、「伝道しない教会は教会ではない」と言ったのはこのことなのです。

9 神の業

だから、伝道は私たちの力でなすものでもありません。3節、主イエスは弟子たちを、ご自身の代理として遣わされます。そこで「狼の群れの中に小羊を送るようなものだ」と言われます。小羊は小さく、弱く、また幼い存在です。主は、「小さい者として弱い者として、罪が支配するこの世に出て行きなさい」と仰っています。小羊は不安です、いつ食べられるか分からないから。私たちも、この世に満ちているサタンの誘惑にあって、主イエスを忘れ、父なる神のみ前からさまよいで、ついには滅び去る、消え去るかもしれません。しかし、主イエスが「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。」と言ってくださる以上、「必ず、私が、あなた方を守り導く」と誓ってくださっていると信じられます。それが判る言葉があります。1節にある「先に遣わす」という部分です。ここを直訳すると、「主イエスの顔の前に行かせる」です。つまり、主イエスの眼差しの届く所に、弟子たちを派遣しておられるのです。主イエス・キリストの眼差しの内にこそ、遣わされた小羊の平安があります。羊飼いイエス・キリストの眼差しの中にあって、小羊は安心してなすべきことをなすことができます。人々に「平和があるように」と祝福を祈ることができます。小羊は、羊飼いなる主の平和のうちに生きているからです。そうして初めて、報いを求めず、この世に奉仕して神の国がすぐ近くに来ている現実を伝えることができます。そうして、私たち遣わされた小羊達は、主イエスをより深く、新しく知り、主イエスに倣う者として変えてい

かれるのです。遣わされた小羊は幸いな小羊です。

10 「しかし」

10節以降には、伝道を受け入れられなかった時にどうすればいいのか？主イエスが語っておられます。私たちが伝道で度々経験することです。受け入れられないことの方が多いのですから。「そのまま立ち去れ」と主は弟子たちに命じておられます。超絶的な力をお持ちの方が、誰よりもお強い方が、意外なことに私たち人間をコントロールしようとはされないのです。神はご自身を拒否する自由を認めるお方なのです。私たち人間を一個の独立した存在として受け入れ認めてくださる神です。

しかし、それだけではありません。主はこう言いなさいと続けます。「**しかし、神の国が近づいたことを知れ**」。11節です。ある方は、この言葉についてこう言いました。「この『しかし』は、主が弟子たちに『その町に置いていきなさい』と命じられた恵みの光の燭台のようだ」。一度は主イエスと弟子たちを拒んだ町でも、その後、神の救いを希う人が現れるかもしれない。その時「神の国がもうすぐそこまで来ている」という知らせによって主イエスの所に導かれてくるかもしれない、そんな恵みの光がともされた燭台、それが、「しかし」以降、『神の国が近づいたことを知りなさい』という言葉だということです。たとえ伝道して拒否されても、そこに神の国の希望の光をともしてさりなさい、それが遣わされた小羊のつとめです…主はそのように仰っています。

11 キリストの眼差しの中にキリストと共に

先週の木曜日五月三十日は、主の昇天日でした。先ほど私は、「エルサレムの旅の途中、主が行こうとされる町に先に遣わされた弟子たちは主の眼差しの中にあり、また主と共にあった」と話しました。主はその後、大きな苦しみを受け捉えられた後、十字架で無残に処刑されます。しかし、三日後に甦り、弟子たちと共に四十日間生活され、そして父なる神のみもとに帰っていかれました。今は、神の右におられ、天から私どもをご覧になっています。私たちはキリスト・イエスの眼差しの中にあるのです。そして、私たちの心の中には主イエスの霊、霊なる神、聖霊が来てくださっています。横浜ナザレン教会の仲間と共に、主イエス・キリストに遣わされた小羊として神の義なる愛に生かされる喜びの命を宣べ伝えていきたいと切に願います。羊飼い主イエス・キリストは、小羊のゆく所、先に待っておられます。